

社会学的概念を「厳密化」し「根源化」する試み

——「社会関係」概念を手がかりに——

那 須 壽

I はじめに

シュッツは一九五五年、詩、演劇、小説という三つの文芸形式における「受け手の態度」に注目しながら著者と受け手の「社会関係」について議論することをひとつのテーマに、或る講演を行なっている (Schutz, 1955a; cf. Embree, 1998)。そこで彼が描いている「著者と受け手」の関係を要約して示せば、それは以下のようなものになる。すなわち「純粹表現」としての詩にあつては、言語による自己表現者としての詩人にとって受け手は必要とされておらず、そこでの受け手はつねに「単なる偶然の目撃者」であるにとどまる。また小説にあつては、「全能」である「語り手 (narrator)」としての作家は、読者による自らの作品の解釈を考慮に入れていただけで、コミュニケーションを特徴づける、読者から一定の対応を引き出そうという意図を欠いている。それゆえに小説の読者は、もはや変更することが不可能なすでに出来上がっている出来事の「意味の解釈者」であ

るにすぎない。他方、演劇にあつては、劇作家が、役者たちの関係を観客たちに直接的に呈示するという「演劇に特有の技術的課題」を遂行することによって、「劇中の人物との関係で全能」である観客たちは、演劇の「現場目撃者 (witness)」であると同時に「意味の補完者」でもある。その意味で演劇の観客たちは、いま眼の前で進行しつつある舞台空間の「共構成者」である (cf. 那須・一九九六)。

他方シュッツは、その講演に先立つ五年前にニュースクール大学院で報告し、その翌年に公刊された「社会関係の一研究」という副題の付された論稿「音楽の共同創造過程」のなかで次のようにも述べている。「作曲家と受け手の間の社会関係は、この音楽作品を自分の音楽思想の表明としてばかりでなく、コミュニケーションの意図をもって創作した——匿名的といえる——他者「作曲家」の経験に受け手が参与し、かつ或る程度までその経験を再創造する、という事実によつてもつぱら確定される」 (Schutz, 1951: 169-170 [233])。このように述べるシュッツは、作曲家と受け手の間に何らかの「社会関係」が確立されるためには、作者の側に「コミュニケーションの

意図」があり、しかも受け手が「作者の経験に参与してそれを再創造する」というのがその前提条件であるとする立場に立っている。

そしてこの立場は、「意味内容にしたがって相互に定位付けられ、かつそれによって方向付けられている」ことを「社会関係」が成立するための基本的要件とみなすM・ウェーバーの立場 (cf. Weber: 1921:13 [43]) と同一線上にある。

だがそうした立場に立つかぎり、「純粹表現」としての詩は言うまでもなく、コミュニケーション意図を欠いた単なる「語り」ないしは「記述」としての小説にあっても、作者と読者の間に何らかの「社会関係」が成立するのは不可能である、ということになるのではなからうか。もしそうであれば、シュッツが一九五五年の講演で、詩、演劇、小説それぞれの「著者と受け手の社会関係」をテーマ化しようとしたのは、彼の議論に含まれている「矛盾」なのではなからうか。

この問いに対しては、すでにI・スバルがその論稿のなかで明快な回答を与えている。彼によれば、この「矛盾」は、コミュニケーション意図をもたない「自己表現」のためだけの言語が、結果として「コミュニケーションの手段」として用いられるという「齟齬」から生じてくる (cf. Subar: 1998)。またわれわれも、ドン・キホーテの三度の旅を引き合いに出しながら、そうした「齟齬」の有様について検討したことがある (那須: 一九九六)。そこで本稿では視点を逆転させて、シュッツが示している文芸の三形式に見られる作者と受け手の関係様式の違いを、「社会関係」概念をめぐる彼

の議論の延長線上に位置付けることによって、この一見したところ「矛盾」であるかにみえる彼の立論を解説してみることにしよう。

II マックス・ウェーバーの「社会関係」概念とシュッツによるその批判

1 マックス・ウェーバーにおける「行為」「社会的行為」「社会関係」社会学の基礎概念に関するシュッツの議論は、概してM・ウェーバーの概念化の不明瞭性を指摘しながらそれを彫琢していくという方向性をもって展開される。そのことは「社会関係」という概念にも当てはまる。すなわち彼は、ウェーバーにおける「行為」概念に関する議論を踏まえながら「社会的行為」概念に関する議論を展開し、さらにそれを踏まえながらウェーバーの「社会関係」概念の不明瞭性を指摘し、その新たな概念化の方法を模索していく。それゆえにわれわれはまず、いまや社会学における共有財産であると言ってよい「行為」「社会的行為」に関するウェーバーの概念化をとりあえず確認しておこう。

彼は「行為」と「社会的行為」を次のように概念化する。「行為とは、単数または複数の行為者がその行動に主観的意味を結びつけるとき、またそのかぎりでの人間行動のことである。だが社会的行為とは、単数または複数の行為者によって思念された意味にしたがって他者の行動に関係づけられ、しかもその経過においてそれ「他者

の行動」に方向付けられている行為のことである」(Weber: 1921: 1[85])。

ウェーバーの「行為」概念に関してわれわれが注目しておかねばならないのは、まず第一に、「行為」は「意味」との関係のもとで定式化されているという点であり、第二に、「行為」は、「主観の意味がそれに付与されているか否か」という基準によって「行動一般」から区別されているという点である。¹⁾このことは逆に言えば、彼の概念化に従えば、「行為」とは区別される「行動」には「主観の意味」は付与されていないことになる。

「社会的行為」の概念化に関しては、ここで以下の二つの点を確認しておこう。そのひとつは、ウェーバーが設定している「社会的行為」の要件に関してである。彼は、「社会的行為」をそれ以外の行為から区別するための要件として、それが「行為者によって思念された意味にしたがって他者の行動に関係づけられ、その経過において他者の行動に方向付けられている」こと、という二つの点をあげている。

ウェーバーによる「社会的行為」の概念化に関して確認しておきたい第二の点は、ウェーバーが「社会的行為は、他者が、過去、現在にとつた行動、あるいは将来とると期待される行動に方向付けられることがある」(ibid.: 11[11])と明言している点である。彼は正当にも、行為者の行為が他者の現在の行動だけでなく、過去および未来の行動にも方向付けられ得ることに配慮している。だが彼の

概念化にあつてはそれが列挙されるにとどまり、他者の過去の行動に方向付けられる場合と現在の行動に方向付けられる場合、また未来の行動に方向付けられる場合という、この三者間の違いについては何ら議論されていない。

以上の諸点をひとまず確認したうえで、本稿のテーマである「社会関係」がウェーバーによってどのように概念化されているのかをみておくことにしよう。

彼は「社会関係」をこう概念化している。「社会関係とは、その意味内容にしたがって互いに相手に定_レ位_レづけられ (eingestelltes)、かつそれによって方向付けられている、比較的多数の人々の行動」のことであり、それゆえ「社会関係」が存立する唯一の契機は、それが何に基づくにせよ、また一時的であれ永続的であれ、「ひとえにただ(意味的に)それとわかる仕方で社会的行為がなされるチャンス、のうちにこそある」。したがって「双方が互いに相手に対して行為する」という関係が少しでもあるということ、これがウェーバーにとつての「社会関係」が成立するための要件である (ibid.: 13[18])。

このように概念化されているウェーバーの「社会関係」に関しては、まず第一に、複数の行為者間で双方向的な「社会的行為」がなされる「チャンス」によって「社会関係」が成立するとされている点に注目しておこう。彼の定義にあつては、「双方向的な社会的行為がなされるチャンスがある」と想定され得ることと、「社会関係が成立している」と想定されることとは等価なのである。

だが第二に、彼が、「双方が互いに相手に対して行為する」、あるいは「相互に相手に対して定位する」という場合、それは、お互いが当の社会関係に「等しい意味内容を付与する」という意味での「相互性 (Gegenseitigkeit)」について語っているのではない (ibid.: 13 [19]) と明言している点に注目しておかねばならない。社会関係は、それゆえに双方の側からみて——たとえば私が愛情をもっている相手は私に敵意をもっているといった具合に——「客観的には一方向的 (einseitig)」 (ibid.: 14 [120]) でもあり得るということである。

さらに第三に、彼は、「われわれの用語法に従えば、双方向的行為の相互関係性が実際に欠如するという結果になる場合に限って、双方向性 (Beidseitigkeit) が欠如すれば『社会関係』の存在は否定される」 (ibid.: 14 [120]) とも述べていることを確認しておこう。

2 シュッツによるウェーバーの「社会関係」概念批判

複数の行為者間に双方向的な社会的行為が生じる「チャンス」があると想定され得る場合に限って、それら行為者間に一定の社会関係が成立していると想定することができる。これが、ウェーバーによる社会関係の概念化の核心をなしている。たしかにこの定義は、「社会的行為を説明しつつ理解し、もってその経過と結果を根源にまでさかのぼって説明する」 (ibid.: 1 [85]) ことによって、それらの社会的行為が構成している社会現象を、そのもつ「意味」に注目し

ながら説明し理解しようとする「理解社会学」の構想のもとにある。しかも、「チャンス」によって社会関係を概念化しようとするこの定義は正当でもある。社会関係は、たとえば知覚、聴覚、触覚といった感覚的観察に対して必ずしも直接的には与えられておらず、それゆえ社会関係の存在は、そうした観察が可能な一定の人々の「外的行動」を当の行為者の意識体験の標徴として「観察」した結果に基づいて、「仮定的な感覚呈示の想像を援用」 (Schütz: 1953: 3 [49]) しながら構成されねばならないからである。「社会関係」という概念は、この意味ですぐれて構成概念であるといつてよい。

だが、シュッツも指摘しているように、ウェーバーの定義には曖昧な点が数多く残されている。思うにそれは、ウェーバーが、「様々な成果を確実な哲学の根本的立場にまで徹底して遡及させたり、基本概念の基層について説明したりすること」 (Schütz: 1932: 5 [19]) を重要でないとして切り捨てたことよっている。シュッツは、社会関係に関するウェーバーの定義に関していくつかの曖昧な点を指摘しながら、それらに対して詳細な考察を加えているが、本稿での問題関心から言えば、とりわけ以下の二つの点が重要である。

(a) 主観的チャンスと客観的チャンス

第一に、社会関係が構成概念であるなら、「社会関係」について語ろうとする場合にはつねに、社会関係を成り立たせる「チャンス」の存在 (すなわち社会関係の存在) を指定する主体・主観への言及

が必要になってこよう。行為者AとBとの間に社会関係が成立している」と判断するのは、果たして当事者なのだろうか。それとも彼らの行為を観察している観察者なのだろうか。第三者的な観察者には「社会関係」が成立していると思えるけれども、その社会関係の当事者たちはそう思っていない、ということは十分にあり得るだろうし、逆に当事者たちには社会関係が成立していると思えるけれども、第三者的な観察者にはそれがわからない、といったことも十分にあり得よう (cf. *ibid.*: 171 [211])。そうであるなら、社会関係について語る際にはつねに、「客観的チャンス」に基づく社会関係と「主観的チャンス」に基づく社会関係という二種類の社会関係が、明確に区別されていなければならない。

だがウェーバーは、「社会的意味現象が相互主観的に一致するものと素朴に前提することで満足してしまった」 (*ibid.*: 6 [30])。その結果、彼は、主観的チャンスに基づく社会関係と客観的チャンスに基づく社会関係の違いについて、取り立てて議論することはなかった。実際、ウェーバーは一方では、「行為者が、相手の方でも「自分がそうであるのと同様に」自分(行為者)に対して一定の態度 (*Einstellung*) をとることを前提にし、なおかつそうした期待に自らの行為を方向付けるかぎり、当事者たちは互いに関係しあっている」 (Weber: 1921: 14 [120])、すなわち両者の間には或る一定の社会関係が成立していると述べながら、他方では、たとえば「友情」といった社会関係が「現に存在している、あるいはかつて存在してい

たということの意味は、……それとわかる仕方で行為がなされるチャンスが現に存在している、あるいはかつて存在していたと、われわれ(観察者たち)が判断することなのであって、それ以外の何ものでもない」 (*ibid.*: 14 [121]) とも述べているのである。言うまでもなく前者の言明は「主観的チャンス」に基づく社会関係を、後者の言明は「客観的チャンス」に基づく社会関係を指示している。にもかかわらず彼は、これら両者の言明の間には何も語っていない。というよりもむしろ、自らが「相互主観的一致」を想定したうえで議論を開始するウェーバーにとって、それについて語る必要はなかった。すなわち彼にとって、その区別は「問題」ではなかったのだろう。

(b) 社会的行為の「双方向性」の諸類型

いま述べた第一の論点は、社会関係のいわば「認識根拠」に関わるものであった。それに対してわれわれが第二に注目しておきたいのは、社会関係のいわば「实在根拠」に関わる問題、すなわち「社会関係」を成り立たせる唯一の契機としての社会的行為の「双方向性」の在り方⁽³⁾に関する問題である。

この問題に関するシュッツの議論は、「行為」概念を「意識の志向性」というレヴェルにまで還元することによってそれを「行動」一般から区別したうえで、その議論の延長線上で「社会的行為」概念を定式化する、という方向性のもとで展開される。

(i) 意味、行為、相互行為

シュッツは、ウェーバーにおける「行為」概念の二つの含意の一方、すなわち「行為」を「意味」との関連で定式化しようとする彼の発想を高く評価する。だがシュッツは——「意味」概念それ自体に関してほとんど何も語っていないウェーバーと違って——意識の志向性のレベルにまで遡って「意味」をめぐる議論を展開することによって、或る体験が「顧慮される (hinblicken)」ことと、或る体験が「有意味的である」こととは等価であり、或る体験に「意味」を結びつけるとは、その体験に「対向する (zuwenden)」ことによって「体験の流れ」からその体験を「縁取りし (wohlumgrenzen)」[際立たせる (herausheben)] ことに他ならない (Schütz: 1932: 39-40, 72 [57-58, 96]) とこの洞察に到達する。⁽⁴⁾

そうした「意味」概念に立脚するシュッツの立場から言えば、ウェーバーの「行為」概念のもう一方の含意、すなわち「行為者が主観的意味を結びつけるか否か」という基準によって「行為」と「行動」を区別しようとするウェーバーの立場は受け容れることができない。なぜなら、「行動」もまた「行為」と同じく、自生的生の現われとしての「体験」のひとつであるに違いなく、そうである以上、「行動」を、「主観的意味」を付与されていないものと概念化することはできないからである。彼がウェーバーの方法に代わって採用するのは、「行為」には、「行動」には欠けている或る特別な位相の「意味」が付与されている、という方向での議論である (ibid.: 16 [31])。そ

してその結果、彼は、「行為とは、前もって考えられた企図に基づく行動」 (Schütz: 1953: 19 [69]) のことであり、「企図との関係から意味を獲得する経験」 (Schütz=Luckmann: 1984: 14) のことである、という定義を手にすることになる。⁽⁵⁾

ウェーバーにおける「行為」概念を検討することによって、以上のような、より厳密化された「行為」概念を手にしたシュッツは、同様の視角からウェーバーの「社会的行為」概念を検討していく。

ウェーバーにおける「社会的行為」は、それが「思念された意味に従って他者の行動に関係づけられ、かつそれ「他者の行動」に方向付けられている」ことによって、単に自分自身の行動に主観的意味を結びつけるだけの「行為」から区別されていた。すなわち「社会的行為」を「行為」のなかで際立たせているのは、まず第一に「他者の行動」であり、第二に、自らの行為がそれに「関係づけられ、方向付けられている」という事情であった。⁽⁶⁾

だが、ウェーバーの「行為」概念——行為の企図によってではなく「主観的意味」一般が付与されているという事情によって獲得される「行為」概念——から出発したうえで、いま確認した「社会的行為」についての定義を受け容れようとする限り、シュッツの「意味」概念からすれば、「自発的能動性に基づくすべての志向作用ばかりでなく、受動的に現われるすべての意識体験までもが、他者と志向的に関係している限りでそれ「社会的行為」に含まれることになる」 (Schütz: 1932: 161 [200])。

そこでシュッツは、とりあえず「他我と志向的に関係づけられた意識体験」というレヴェルにまで自らの議論を還元し、そこを起点に議論を積み上げながら、「社会的行為」についての厳密な定義を獲得していく。彼の緻密な、それゆえ若干込み入った議論の結論だけを要約的に示せば、それは以下になるろう。

彼はまず、あらゆる他者体験の根源にあるそうした「他我と志向的に関係づけられた意識体験」を特徴づけている自我の態度を「他者定位 (Fremdinstellung)」と名付ける。そうした意識体験は、受動的に現われることも自発的能動性に基づく志向作用として現われることもあり得る。前者が「他者知覚」であり、後者が「社会的行動」一般である。そしてこの「社会的行動」一般のなかで、「その行動があらかじめ企図されている」場合、そうした社会的行動がとくに「社会的行為」と名付けられる (ibid.: 161-164 [200-203])。ここに、より厳密な意味での「社会的行為」概念が獲得されることになる。

ウェーバーの定義によつて指示されている「社会的行為」は、シュッツによつて定式化された、他のすべての形式がその内部で生じるという意味でもっとも広義の「他者定位」に等しい。それゆえウェーバーの「社会的行為」には、たとえば「共感」や「反感」といった、他者の行動に関係づけられそれに方向付けられてはいるが、あらかじめ企図されることはない、「社会的行動」一般としての「情動的活動」は言うまでもなく、受動的に現われる他者の行動につい

ての単なる「知覚」までもが、結果として、すなわち自覚されることなく含まれることになった (cf. ibid.: 162-163 [200-202])。

とはいえもちろん——これまでのわれわれの論述から明らかなように——シュッツの獲得した厳密な意味での「社会的行為」は、ウェーバーの定義が指示している「他者定位」と二者択一の関係にあるのではない。シュッツの「社会的行為」は、社会的行動一般のなかの、或る特定の形態として、それゆえにまた、あらゆる他者体験の根源にある「他者定位」にあくまで基礎づけられたものとして概念化されているのである。彼の概念化する他者定位、社会的行動一般、社会的行為は、いわば入れ子式の関係にある。

(ii) 他者作用としての社会的行為

シュッツによるおおよそ以上のような議論によつて、「社会的行為」に関するウェーバーの定義の曖昧性は、ほぼ払拭されている。

とはいえそれで十分なわけではない。もしもウェーバーが——シュッツの言うように——他者の行動に対する「有意味の関係づけ」について語る際に念頭に置いていたのが、「(1) 社会的行為者が自らの行為によつて、他者から或る特定の行動を引き出そうと意図する場合、(2) まさしくこの社会的といわれる行為が、他者の行動によつて引き起こされる場合」(Schütz: 1932: 164 [203-204]) という二つの場合であるなら、しかも彼がこの両者を明確に区別していないのであれば、彼の「社会的行為」についての定義は、上で述べ

たのとは別の意味での混乱を招きかねないからである。

実際ウェーバーは、これら二つの場合を自覚的に区別してはいなかったのだろう。彼の「社会的行為」を単なる「行為」から際立たせている「他者の行動」は、彼の定義に従えば——先に(II-1)確認したように——「現在または未来」あるいは「過去」のいずれのものでもあり得るからである。だが、私の行為が関係づけられ方向付けられている「過去」の他者の行動はすでになされてしまっており、もはやそれを変更することは不可能であるのに対して、「現在」なされつつある、あるいは「未来」においてなされるであろう他者の行動は、いまここでなされつつある他者に方向付けられた私の行為によって変更、ないしは構成することが可能である。こうした事情に目を向けると、私がいましつつかある行為からみて、果たして両者は同列に扱うことが可能なのだろうか。

先に引用したシュッツによる定式は、この両者の違いを注意深く、かつ明瞭に表現している。彼は、(1)にあつては、「社会的行為者が自らの〈行為〉によって他者と関係する」と表現しているのに対して、(2)にあつては、「社会的といわれる行為」が他者と関係する」と表現しているのである。前者が言及しているのは、他者と関係づけられることによって「行為」が「社会的」になっていくという事情であり、後者が言及しているのは、すでに「社会的」である「行為」、すなわち「社会的行為」が他者と関係づけられているという事情である。「自然事象によってではなく他者の行動によつ

て引き起こされた」という事情が、私の行為を「社会的」なものにするわけではない (ibid.: 166-167 [206])。

行為は、たしかに他者の過去の行為にも関係づけられるだろう。

だがその関係づけの様式は、現在または未来の他者の行為に対する関係づけの様式とは決定的に異なっている⁽⁷⁾。現在なされつつある行為に対して、過去の行為はその「理由」として、現在または未来の行為はその「目的」として、それぞれ関わっているのである。ここに、行為の動機の二様相、すなわち「目的動機」と「理由動機」が区別されねばならないひとつの根拠がある。

シュッツは、(1)のような事情のもとにある社会的行為のことを、とくに「他者作用 (Fremdwirken)」と名付け、それこそがじつは、ウェーバーが彼の「社会的行為」概念を定式化した際のモデルであつたと指摘する⁽⁸⁾ (ibid.: 165 [204-205])。他方、(2)のような事情のもとにある行為のことを、彼は「他者被作用行為 (Fremdbewirktes Handeln)」 (ibid.: 167 [206]) と名付けている。いうまでもなく「他者被作用行為」それ自体は、その語の厳密な意味で「社会的」であることもないこともあり得る。すなわち「他者被作用行為」は、「他者作用」であることもないこともあり得る。またその逆のことも成り立つ。「他者作用」は「他者被作用行為」であることもないこともあり得る、ということである。すでに明らかなように、この両概念もまた二者択一の関係にはない。

(iii) 作用関係としての社会関係

以上のような「行為」「社会的行為」に関する厳密な定義に基づいて、ここでのテーマである「社会関係」について語ろうとすれば、それゆえ「客観的チャンス」としての社会関係と「主観的チャンス」としての社会関係という、先に区別した二種類の社会関係とは別に、他者との関係の在り方の違いに対応した区別を「社会関係」という概念のなかに導入しなければならない。シュッツが、「他者定位」という最広義の他者体験のみが生じる関係のことを「定位関係 (Einstellungsbeziehung)」と名付け、その定位関係に基づけられない「他者作用」が生じてくるような関係のことを「作用関係 (Wirkensbeziehung)」と名付けて、両者を区別しようとしているのは (Schütz: 1932: 172 [213])、こうした文脈のなかに位置付けられねばならない。

われわれはここでもまた次の点を確認しておきたい。「作用関係」と「定位関係」もまた、単なる二者択一の関係にあるのではないという点である。シュッツにあっては、前者はあくまで後者を前提にしながら、あるいはそれに基づけられながら、そこから唯一「双方向性」という性格を獲得することによって後者のなかで、際立ってくる、という形で概念化されているのである。それゆえここでの議論の結論として、以下のように言うことができよう。「基本的には一方向的である他者定位」(ibid.: 164 [203]) のうちで、生じるあらゆる「他者関係」のなかで、唯一「双方向性」という性格を獲得し得る「純

粋な社会的行為としての他者作用」(ibid.: 165 [204]) が生じる「社会関係」こそが、「双方向性」によって特徴づけられるもつとも厳密な意味での「社会関係」であり、それ以外の他者関係はすべてそこからの「変異」ないしは「派生体」として考察しなければならない。ここで「もつとも厳密な」と言うのは、もつとも広い内包ともつとも狭い外延によって規定されていることを意味する。

III 社会関係としての「作者—受け手」関係

人々の間で、もつとも厳密な意味での「社会関係」が実際に成り立つためには、行為者とその相手がともに、「他者作用」において関係づけられていなければならない。それは、いわゆる「動機の相互性の理念化」、すなわち「私の目的動機は相手の理由動機になるだろう」(Schütz: 1953: 23 [3]) という理念化によって両当事者がともに基礎付けられている場合に限られている。そしてそれが、あらゆる社会現象の基礎にある理念的な社会関係の在り方である。

だが、社会関係とは、すでに確認したように本来的に、(per se) 構成概念であり、それゆえにそれは、いわゆる主観的または客観的「チャンス」という観点から規定されざるを得ない。こうした事情には、或る必然的帰結が伴っている。実際の社会関係にあっては、それを成り立たせている「他者の行動との関係づけと方向付け」の内、

容については言うまでもなく、その形式でさえも様々であり得ると
いう帰結である。複数の当事者たちの間に双方向的な社会的行為が
生じるチャンスがあると——当事者自身によって、あるいは第三者
的な観察者によって——想定される場合であっても、それらの社会
的行為は、たとえば以下のような意味で、可能性としてはつねに一
方向的であり得るということである。

まず「主観的チャンスに基づく社会関係」について言えば、それ
を成立させる双方向性が、相手に対する行為者の側での「前提」で
あり「期待」であるにとどまる限り、その社会関係は、たとえば
ウェーバーが指摘している「一方の友情と他方の敵意」といったよ
うな、その内容からみて、「客観的に一方向的」(Weber: 1921: 14 [20])
である可能性に開かれたままである。だがそれ以外にも、たとえば
シュッツが例示している「恋愛関係」のように、「相手が私に定位し
ているか否かについて知ることは、相手に向ける私の定位の前提で
はなく」(Schütz: 1932: 176 [217]) といった「社会関係」すら、事
実としては考えられよう。この社会関係を特徴づけているのは、内
容的に、一方向的であるばかりか、形式的にも、一方向的である他者関
係である。

他方、もう一方の「社会関係」概念、すなわち「客観的チャンス
に基づく社会関係」に関して言えば、第三者的な観察者が行なえる
のは、ただ複数の行為者たちの意識経過の標徴としての外的行動の
観察に基づいて、それらの行為者間に「相互に関係づけられ方向付

けられる社会的行為が生じるチャンスが存在している」蓋然性や可
能性に関して判断をくだすことだけである (ibid.: 173 [214])。それ
ゆえそうした判断のみに基づく「社会関係」には、行為者によって
遂行されているのは——内容的にも形式的にも——一方向的な「社
会的行為」であるという可能性がつねに伴っている。

要するに、理念的には「双方向性」によって定義される「社会
関係」は——その存在根拠が「主観的チャンス」に求められていよ
うと「客観的チャンス」に求められていようと——可能性としては、
以上のような様々な意味での「一方向性」に対してつねに開かれて
いるのである。この点を踏まえながら、先にシュッツの一九五五年
講演「メモ」に基づいて確認した、文芸の三形式それぞれにおける
作者と受け手の関係について振り返ってみよう。

もしもわれわれが「社会関係」という用語を、もっとも厳密な意
味での「双方向的な作用関係」に限定して用いた場合、あるいはさ
らに、一方の「他者作用」と他方の「社会的行動」一般から成り立
つ関係までをその用語に含めた場合ですら、たしかに、作者と受け
手の間にそうした意味での「社会関係」が成り立つのは、唯一「演
劇」という形式においてだけであるということになる。したがって
そうした立場に立っている限り、それ以外の形式、すなわち純粹表
現としての「詩」はいうまでもなく、コミュニケーション意図を欠
いた単なる「語り」としての「小説」に関しても、そこでの作者と
受け手の間の「社会関係」について語ることはひとつの「矛盾」で

あるということになる。

だが、われわれがこれまでシュツツの議論を検討しながら確認してきた「社会関係」をめぐる先のように事情に照らして言えば、そうした「矛盾」は、なにも「詩」や「小説」のみに限定されているわけではないことが明らかになろう。それはむしろ、他者と自己との関係に本質的な「矛盾」であり、それゆえにそれは、行為者にコミュニケーション意図があるか否かに関わりなく、あらゆる「社会的行為」にとつて、それゆえにまたあらゆる「社会関係」にとつて本質的な「矛盾」である。より端的に言えば、それは、自己を超越した「他者」存在それ自体に本質的な特質の現われなのである。⁽⁹⁾

もしもわれわれが、そうした事情を十分に踏まえたうえで「社会関係」について論じようとすれば、もつとも広い内包ともつとも狭い外延をもつという意味でもつとも厳密な、理念型としての双方向的な社会関係を議論の出発点にするわけにはいかなかならう。そうした意味での「厳密性」は、発生的な意味での「根源性」を意味しているわけでは決してないからである。双方向的な社会関係を起点にした議論は、むしろ一方で、理念型としての社会関係をすでに出来上がったものとしてそれを固定化 (fixing) し実体化 (reifying and hypostatizing) し、さらには理想化 (idealizing) することに通じており、また他方で、個々の社会関係の構成過程を無視することにも通じている。そうした方向での議論にあつては、言うまでもな

く個々の社会的行為は、すでに出来上がっている双方向的な社会関係を規準にしながら、それに合致するような仕方では構築されねばならなくなる。その際、当の社会関係に合致しない社会的行為は、それに合致しないというただそれだけの理由で、即座に「逸脱行動」と定義されることになる。そこでは、「変異」している「派生体」とみなされるのは、まさしく双方向的な「他者作用」が欠如している社会関係なのである。そうした観点から「詩」や「小説」において顕現してくる「矛盾」についてみた場合、それは、それらの文芸形式にコミュニケーション意図がまさしく欠如していることの表われであるということになり、したがってそうした事情は、それらの形式の負の特性として捉えられざるを得なくなろう。

むしろわれわれは、社会関係とは、個々の社会的行為によつて構築されつつある進行中の過程としてある、という事情に注目しながら、個々の社会関係に接近しなければならない。そのためには、ひとつの理念型としてすでに出来上がっている双方向的な社会関係から議論を始めるのとは逆に、「他者体験」の根源にある、基本的には一方向的な「他者定位」から話をはじめて、それが双方向的である場合に形成される「定位関係」を基礎に、そこから個々の社会関係が様々な注意変様を経ながら構成されてくる、その過程を探究するという方向性をもった議論を展開しなければならない。そうした議論においては、第一に、「双方向的な他者作用」に基づく「厳密な」意味での社会関係のほうで、むしろ派生体であるとみなされるかもし

れない。また第二に、いまだ一方向的であるに留まる、だがしかし可能性としては双方向的になり得る「他者の行動に関係づけられ方向付けられている社会的行為」を「社会関係」という項目のもで論じるか否かは、単なる用語上の問題となろう。

とはいえもちろん、そうした方向性をもつて社会関係を論じようとする際にも、シュッツの議論から導き出されるこれまで述べてきた諸々の論点のほかに、次の二つの点をつねに念頭に置いておくことが肝要であろう。

第一に、語の厳密な意味での双方向的な社会関係を成り立たせるのは、「送り手」としての私ではなく「受け手」としての私である、という事情である。たとえ劇作家が、「演劇に特有の技法的課題」を遂行するなかで「観客」を舞台空間の共構成者として想定しているとしても、そしてそれが理想的な形で遂行された場合には、作家、役者、観客という三者相互の「他者作用」によって舞台空間がまさしく、*hic et nunc* (Here and Now) 作り上げられるだろうと想定され確信されるとしても、もしも「受け手」である複数の私がそれに「他者定位」しなければ、そうした作家による試みは無に帰すことになる。逆に、「詩人」には「受け手」の解釈に供すると言う意図が欠けているとしても、私はその詩の「受け手」としてそれに接近する場合には、たとえ私とその「詩人」とっては「偶然的聴き手」であったとしても、私はその詩人との間に一定の「社会関係」を確立することが可能になろう。

こうした観点から言えば、社会関係をめぐるシュッツの議論は、まさしく社会関係を構築する際の優先権を作者から受け手へ、あるいはより一般的に言えば行為者からその相手へと、権利委譲することを含意しているといえよう。詩人にとっては単なる「自己表現」のための手段として用いられた言語を「コミュニケーション」のための手段と読み替えることによって、結果として詩人との間に一定の「関係」を確立するのは、まさしく「受け手」にはかならない。それゆえにシュッツは、文芸の三形式それぞれの作者と受け手の「社会関係」について議論する際には、まさしく「受け手」の側にたった議論を展開しなければならなかったのである。

第二に留意しておくべき点は、社会関係の成立がすべて本質的に「一定の社会的行為が生じるチャンスがあると想定すること」に依存しているとしても、その想定の実性、*reality* の程度は様々であり得るという事情である。この論点は、「主観的チャンス」に基づく社会関係にも「客観的チャンス」に基づく社会関係にも等しく当てはまる。

まず前者に関して言えば、「他者作用も他者定位も……他者が他者定位を遂行しなければならないことを含意してはいない」がゆえに、社会関係はすべて、まずもって「*possible orientation*」に依拠せざるをえない (Schütz, 1932: 169 [2009])。だが、私が相手と時間・空間を共有しているかぎり、言い換えれば私とその相手が共に当の「社会関係」のなかで生きている、すなわちわかれわかれが「共に時を経ている」限り、私もその相手も——そうしようと思えば——それぞれが

お互いの「他者」の進行中の生に関与し、相手の思惟を、それが一歩一歩構築されるに依じて、生ける現在の形で把握することができ（cf. Schutz: 1953: 16 [65]）。それゆえその形式に関して言えば、そこでの他者が原的に体験され得る（Schutz: 1945: 221 [26]）、すなわち類推による判断を媒介することなく前述語的に体験され得る、そうした対面状況にある「われわれ関係」においてのみ、社会関係の存立に関する想定もまた、もつとも確実性の程度の高い判断たり得る。それ以外の社会関係はすべて、そこからの派生的形態として、その確実性の程度は、時間的・空間的距離に比例して減少する。⁽¹⁰⁾ シュッツによって提起された、社会学にとつてきわめて重要な知見、すなわち「対面関係以外の社会関係はすべて、全体性をもった他者の自己を、時間と空間の共有のなかで原的に体験することから派生してくる」(ibid.)という知見は、まさしく以上のような事情のなかに——しかもそのような事情のなかにのみ——その根拠をもっている。⁽¹¹⁾

他方、「客観的チャンス」に基づく社会関係は、いかなる意味においても確実な判断に到達することはできない。観察者が或る社会関係の存在を「確認」することができるのは、「被観察者に対する質問を通してだけ」(Schutz: 1932: 173 [214])なのである。ただし第一に、そうした質問が可能であるのは、ごく限定された場合に限られており、第二に、その観察者は質問をすることによって、もはや単なる第三者的な観察者ではなくなっている。その場合、当の観察者

自身がその回答者との間に一定の社会関係を確立しているのである。

IV 結びにかえて

われわれはこれまで、文芸の三形式に関するシュッツの議論の一部を確認しながら、それを先に確認した彼の社会関係に関する議論に投影することによって、「社会関係」概念を「厳密化」しようとするシュッツの試みの方向性を明らかにしようとしてきた。

社会関係に関するシュッツの議論は、ウェーバーが定式化した概念に付着している曖昧性を指摘しながらその「厳密化」を図るという方向性をもって展開されていた。⁽¹²⁾ しかも重要なことは、彼がそこで第一義的に目指していたのは、社会関係の当事者たちにとつて外在的な何らかの基準を導入することによって内包の極大化と外延の極小化をはかる、という意味での「厳密化」ではなかったという点である。シュッツによる概念の厳密化の試みは、まず行為者と観察者の観点を明確に区別したうえで、あくまで行為者の観点到立った「厳密化」を目指す試みであった。彼が、いわゆる「基づけ」関係を明らかにするためにひとまず意識の志向性のレヴェルにまで議論を還元し、あらゆる他者体験の基盤にある「他者定位」を起点にしながら議論を展開しようとしたのは、まさしく行為者の観点を確保するためだったのである。行為者の根源的な他者体験を起点に、そこから厳密な意味での社会関係の構成過程を探究する彼の「厳密化」

の試みは、この意味で——すなわち時系列的あるいは心理学的——因果論的な「発生」とは厳密に区別される意味で (cf. Husserl: 1950 [59]) —— 発生論的な「厳密化」の試みであり、「根源化」の試みであったと行うことができる。彼はそうした議論を展開することによって、一方では内包の極大化と外延の極小化という意味での「厳密さ」を「社会関係」概念に確保しながら、それと同時にまた他方では、それ以外の形式にある他者関係をも、それと同一の枠組みのなかで議論することを可能にしたのである。彼のその試みは、それゆえにひと言で言えば、ウェーバーの彫琢した「社会関係」概念の厳密化と根源化に基づく意味拡大の試みであった、と行うことができる。

われわれが日常生活のなかで用いる、実体化されてそこに在る社会関係から議論を開始するのではなく、それをひとまず括弧にくくり、行為者の観点を確保するために意識の志向性のレヴェルにまで議論を還元したうえで、そこから社会関係の構成過程を探究しようとするシュッツの議論は、一般的に言えば、まず第一に、「世界一般を、それゆえにまた社会的世界の意味現象を、われわれが日常生活のなかで外的世界の前所与性を考慮に入れるのとまったく同じ仕方、相互主観的に一致するものと素朴に想定し、それで満足する」(Schütz: 1932: 6 [20]) という——ウェーバーの立場に付きまとう——危険性に道を閉ざしている。また第二に、「行為者の心のなかの主観的出来事を、観察者だけに接近できるその出来事の解釈図式と

取り替え、したがって主観的現象を解釈するための客観的図式とこの主観的現象それ自体とを混同する」(Schütz-Parsons: 1978: 36 [110]) という立場に立った言説の前に開かれている、常識的思考と科学的思考の誤った「混同」と「切断」、すなわち科学的思考のなかに常識的思考を無批判に「密輸入」する一方で、科学的思考が日常的思考を安易に「忘却」するという——パーソンズの立場に付きまとう——危険性¹⁹⁾にも道を閉ざしている。

本稿での問題関心にとくに限定して言えば、いま要約的に特徴づけた社会関係に関するシュッツの議論に基づくかぎり、「詩」も「小説」も、「社会関係」という項目のもとで何の矛盾もなく議論することが十分に可能になる。だがそればかりではない。われわれは、彼が提示している文芸の三形式のなかに、詩的形式の社会関係から小説的形式での社会関係へ、そして唯一、双方向性が確保されている演劇的形式での社会関係へという、社会関係の発生的段階——これは発達段階とは厳密に区別されねばならない——をすら見出すことが可能なのである。このことはまた視点を変えて言えば、シュッツの議論に基づくかぎり、行為、相互行為、社会関係を同一の枠組みのもとで論じることが可能になるということでもある。

さらにそのうえ彼の議論は、われわれの社会的世界が、われわれの「他者作用」の対象には決してなり得ない「過去」の人々や、逆にわれわれが「他者作用」の被対象には決してなり得ない「未来」の人々との「社会関係」によっても構成されているという事情にも

正当に光を当て、しかもそれを、実際に対面関係にある（あるいは可能性としてそうであり得る）人々との「社会関係」を議論するのと同じ、枠組みのもとで議論することをも可能にしている。われわれの社会的行為を導く企図は、単に周囲世界 (surrounding world) を構成している諸対象に対してだけでなく、われわれの経験のあらゆる志向対象にも方向付けられることが可能なのである。じつにシュッツにとって世界とは、物理的宇宙だけでなく社会的、文化的宇宙をも含んだ最広義の自然であるばかりでなく、経験の志向対象からなるどの領域のことでもある (cf. Schutz: 1970: 169 [235])。

とはいえもちろん以上の議論ですべてが解決しているわけではない。むしろ本稿では、広大な探究の領野に開かれている問題の所在が明らかにされたにすぎず、その意味で本稿はさらなる探究のための橋頭堡を築く作業に充てられているにすぎない。われわれは本稿に引き続いて、まずは彼の「言語」をめぐる議論をさらに詳細に検討してみなければならぬだろう。

*本稿は、1995年4月28～29日、ニュースクール（ニューヨーク）で開催されたシンポジウムに提出された諸論稿を収めた *Alfred Schutz's "Sociological Aspect of Literature": Construction and Complementary Essays*, Lester Embree (ed.), Kluwer Academic Publishers, 1996のために、1995年12月に書かれた "Amplifying the 'Sociological Aspect of Literature' with the

Concept of Social Relationship," *ibid.*, pp. 129-148 を著者自身が日本語に翻訳したものである。ただしその第一節は省略し、またそれに伴った本文の若干の変更ならびに補註の追加と削除を行っている。

註

(1) ウェーバーの「行為」概念に含まれている、これまでほとんど配慮されることがなかったこの二つの含意を区別することの意義については、後の議論でもその一端が明らかになると思うが、合わせて那須（一九九二）も参照されたい。

(2) 英訳書は、ウェーバーの *ursächlich* を *causal* と英訳することによって、その語の重要な含意を汲みとりそこなっている。私の考えでは、ウェーバーのこの語は現象学的な根源性を含意していると解釈されるべきであり、したがってそれは、心理学的な、または時系列的な因果性と等置されてはならない。この点に関してはかつて論じたことがあるので、那須（一九九七）第四章を参照願いたい。

(3) もちろん、ここで社会的行為の双方向性の「在り方」とはいつでも、それはウェーバーが、たとえば「闘争、競争、友愛などといったように、社会関係の内容はじつに様々であり得る」(cf. Weber: 1921: 13 [118]) と述べているような意味での「在り方」のことを言っているのではない。そうではなくてここで問うているのは、社会的行為の「双方向性」それ自体を根拠付けている、社会的行為それ自体の「在り方」に関してである。

(4) こうした「意味」に関するシュッツの規定は、「感覚的な諸契機を、生気づける、意味付与的な層を介して、それ自身のうちにいかなる志向性をもたない感覚的なもののうちから具体的な志向的体験が成立してくる」(Husserl: 1950: 192 [92]) と述べるフッサールの議論と軌を一にしている。

(5) これらの論点に関しては、那須（一九九二）を参照のこと。

- (6) ここでは区別することなく用いているが、「関係づけられる」とは他者の意識体験への「対向」を、「方向付けられる」とは、単なる「対向」ではなく「動機連関的対向」を意味している (cf. Schutz, 1932: 166 [205])。したがってこの区別が、すぐあとでわれわれがシュッツに従って導入する「他者作用—他者被作用」と「それ以外の他者定位」との区別を基礎付けている。この論点と、「外的—内的」行為の区別とを結びつけて考える場合には、社会的行為にさらに新たな次元が加わってくるが、これに関してはここでは詳論することができない。同様に、それら以外の規準による社会的行為の下位区分——たとえばその目標が「他者の意識」に向けられている場合と「他者の行為」に向けられている場合の区別や (ibid.: 165: [204-205])、「他者の匿名性の程度」による区分 (ibid.: 168-169 [208])——についても、ここでは論じることができない。

- (7) 現在の他者の行為に対する関係づけの様式と、未来の他者の行為に対する関係づけの様式との間にも、もちろん探究すべき重要な違いが存在しているけれども、ここでは論じない。

- (8) 「社会的行為」に関するウェーバーの定義は、シュッツの意味での「他者定位」と等置可能である一方、彼がその定義を構成する際に念頭に置いていたのは「他者作用」であったというこの混乱のなかに、ウェーバーの基礎概念に含まれている曖昧性の根拠をみることできよう。

- (9) 「他者の世界という超越」に関しては、とくに Schutz (1955b) pp.316-318 [149-151], Schutz-Luckmann (1984) pp.147-161, ならびに那須 (一九九七) 第三章、第七章を参照のこと。

- (10) ただし「内容」に関して言えば、これとは別の論点が生じてくる。すなわち他者が匿名的であればあるほど、その他者は類型性のもとで予想されることになり、そしてその他者が自己類型化に基づいて行為すればするほど、私とその他者との行為の内容に関する、「一致」の度合いは増加する、と云う事情である (cf. Schutz, 1953: 33 [85-86])。これは、行為の類型化に基づく物象化という問題である。

- (11) 他の関係に対する「われわれ関係」「対面関係」の「優位性」は、その形式的な側面に関してのみ言えることであって、具体的な「対面関係」はそれ以外の諸関係によって侵略されているのがつねである。これは知識社会学の問題である。

- (12) パーソナリズムもまた、ウェーバーの議論の曖昧性を指摘することから議論を開始しているけれども、いわゆる「分析的リアリズム」の立場に立つ彼が目指している「厳密化」は、シュッツの目指す「厳密化」とは必然的に異なったものになる (那須・一九九七・第五章)。

- (13) この点に関しては、かつて詳細に議論したことがあるので、那須 (一九九七) の第五章を参照願いたい。

【引用文献】

- Embree, Lester (1998) *Alfred Schutz's 'Sociological Aspect of Literature': Construction and Complementary Essays*, Kluwer Academic Publishers.
- Husserl, Edmund (1950) *Ideen zur einer reinen Phänomenologie und Phänomenologischen Philosophie, Erstes Buch*, Husserliana Bd. III, Martinus Nijhoff. [渡辺二郎訳「イデーン—」みすず書房]
- 那須 壽 (一九九二)「A・シュッツにおける行為理論の構想」、『文学研究科紀要』第三七輯、早稲田大学大学院文学研究科、六一—七四頁
- 那須 壽 (一九九六)「A・シュッツにおける現象学的文芸社会学——ひとつの解説の試み」、『文学研究科紀要』第四一輯、早稲田大学大学院文学研究科、一三九—一五一頁
- 那須 壽 (一九九七)『現象学的社会学への道』恒星社厚生閣
- Schutz, Alfred (1932) *Der sinnhafte Aufbau der sozialen Welt*, Julius Springer. [佐藤嘉一訳「社会的世界の意味構成」木鐸社]
- Schutz, Alfred (1945) "On Multiple Realities," in *Collected Papers*, vol.1, Martinus Nijhoff, 1962. 「多元的現実について」 渡部・那須・西原訳『シュッツ著作集』第二巻、マルジュ社

- Schutz, Alfred (1951) "Making Music Together," in *Collected Papers*, vol.2, Martinus Nijhoff, 1964. 〔音楽の共同創造過程〕 渡部・那須・西原訳 『ハトマン著作集』第三巻『ベルシム社』
- Schutz, Alfred (1953) "Common sense and Scientific Interpretation of Human Action," in *Collected Papers*, vol.1. 〔人間行為の常識的解釈と科学的解釈〕 渡部・那須・西原訳 『ハトマン著作集』第一巻『ベルシム社』
- Schutz, Alfred (1955a) "Sociological Aspect of Literature," Lecture memorandum for the Meeting of Alumni Association of Graduate Faculty of Political and Social Science of the New School for Social Research, No.12957-12958 in Schutz Nachlass at the Alfred Schutz Archive at Waseda University.
- Schutz, Alfred (1955b) "Symbol, Reality and Society," in *Collected Papers*, vol.1. 〔ハトマン・現実・社会〕 渡部・那須・西原訳 『ハトマン著作集』第二巻
- Schutz, Alfred (1970) *Reflections on the Problem of Relevance*, Yale University Press. 〔那須・浜・今井・入江訳 〔日常世界の構成〕ベルシム社〕
- Schutz, Alfred-Parsons, Talcott (1978) *The Theory of Social Action*, Indiana University Press. 〔佐藤嘉一訳 〔社会理論の構成〕木鐸社〕
- Schutz, Alfred-Luckmann, Thomas (1984) *Strukturen der Lebenswelt*, Bd.2, Suhrkamp.
- Srubar, Iija (1998) "The Construction of Social Reality and the Structure of Literary Work," in Embree, L. (1998) pp.75-88.
- Weber, Max (1921) *Wirtschaft und Gesellschaft*, fünfte, revidierte Aufl., J.C.B. Mohr. 〔筑波大学訳 〔社会学の基礎概念〕 〔ハトマン社会学論集〕青木書店]